

空虚な、素漠たる思ひで、僕は方々知人の家を訪づれたりもした。

父は幾らか好くなつた様で、毎朝太鼓を叩いたりする。

大神宮だから高天原をやるのだ。

僕は観音經を暇にまかせて練習した。

三里ばかり山の上の出石寺へも一日登つた。

敵齡で此の寺に僕は、半年あまり居た事があるのだ。

景色が好くて冬は寒い。

高野でチブスをやつたとかで、歸つて來てゐる隆明君や、隆禪君など七八人居た。

和尚と、執事も隆泰君も山を下つてゐて留守、茶堂の親父も、料理番の愛さんも、めしたきの爺さんも、お講者掛かりも相變らずだ。

僕は晝めしを御馳走になつて、泊る事をすゝめられたけれど、守り札を十枚ばかり貰つて、それから名刺の裏に、三百年ばかり長生きする様にと書いて、本堂の格子に貼り付けて、カネを鳴らしながら、観音經を一巻拜んで歸つた。